

リレーメッセージ

動機はともあれマイナス十四%!

地球温暖化防止活動推進員 北沢拓(飯田市)

坂道の多い飯田下伊那地方では「自転車に乗らまいか」と誘うと、「坂道ばっかで」と返されます。私自身も、運転免許を取得して以降、徐々に縁遠くなってしまいました。再び乗るようになったきっかけは、足首捻挫のリハビリのママチャリでの調子が良かったことです。もう少しよい自転車(クロスバイク)にして、週に数回朝食前に三十分間の走行を一年間続けた



飯田市役所自転車部 平成20年初乗り

ところ、体重、体脂肪、内臓脂肪が十四%減、ウエスト十二センチ減で、お腹の凹みと括れができました。人は見た目が九割と言われますが、少し細身になると行きつけのお店でも扱いが丁寧になり、色々な話をしても若い人達が耳を傾けてくれるようになりました。そんな訳で、ちよつと動機は不純ですが、「温暖化防止対策は自転車」と、多くの人達に宣伝しています。

昨年十二月には、多くの人達の協力で飯田市役所自転車部を発足させることができました。自転車によるまちづくりや地域振興政策を推進している牧野飯田市長も一会員で、「ダイハツボンシヤンス飯田」の福島晋一

代表にも感化され、朝早くから自転車に親しんでおられます。自転車の魅力は、季節を感じられる心地よさと行き交う人々と挨拶を交わせられる速度にありま。環境に優しいことはもちろんですが、老化防止、健康増進、経済性も

レポート「地球温暖化防止講演会」

大雪の中、二百人の老若男女が聴講

二月三日(日)、高森町福祉センターにおいて、地球温暖化防止講演会実行委員会が主催する「地球温暖化防止講演会」が開催された。



講師の財団法人「気象業務支援センター」気象予報士の村上貢司先生から「伊那谷の気象と地球温暖化が及ぼす当地域への影響」と題して、人間による温暖化が生物の絶滅の危機、農作物の異変、台風の大規模化などを招来している現状がわかりやすく説明された。

この講演会は、深刻化する地球温暖化問題を地域住民の一人ひとりが問

兼ね備えています。その普及のためには、駐輪場や専用道路の整備、修理等対応できる販売店の確保も課題ですが、広域化の風潮にあつて、自転車で行動できる位のコミュニティの大きさを守っていくことも重要だと考えます。

師の選定・依頼、後援依頼、チラシ作成、広報活動、運営等の諸準備を進めてきたもの。聴講者からは「温暖化については承知していたが、当地域への影響を知り、深刻な問題として受け止めた」、「具体的な【数値】」、「地域」、「事象」をよりリアルにご教示いただき大変参考になった」等の感想が寄せられた。

また、次代を担う小学生が、熱心にメモを取りながら聞き入り、質問している姿が見られ、心強いものが感じられた。

実行委員長を務めた浮島仁子さん(地球温暖化防止活動推進員(大鹿村))は「今回の講演で温暖化の危機意識が高まり、地域全員が防止活動に自発的、具体的に取り組み契機になればと思っております。」と講演会を振り返った。

※当日、聴講者に配布された「地球温暖化を防止

地球が養う多くの動植物の一つに過ぎない人間の身勝手な手招いた温暖化は、人間のみならず、地球上のすべての動植物を脅かすものとなりつつあります。

地球が永遠に輝き続けるために、人間には今、他生物を思いやり、立ち戻る勇氣と決断が求められています。

地球に住む六十数億人の一人ひとりの小さな努力が、大きな成果となって地球を救うのです。

二月に開催された「地球温暖化防止講演会」と「南信州・地球温暖化防止エコ推進セミナー」の概要を掲載しました。紙幅の関係で詳述できませんでしたが、これらの催しに、今日の課題である温暖化に取り組む契機になればと願っています。

考え、行動しよう!!

地球温暖化防止のために今できることを

南信州・地球温暖化防止エコ推進セミナーに二百八十名参加

二月二十五日(月)、飯田合同庁舎において、環境省の「環境と経済の好循環のまちモデル事業」を受託した南信州・地球温暖化防止エコ推進協議会が、地球温暖化について考え、CO2削減をビジネスや地域づくりはどう関わらせて行くかを考える「南信州・地球温暖化防止エコ推進セミナー」を開催した。

講演では、先に開催されたCOP13(国連気候変動枠組条約第十三回締約国会議)に、NGOの立場で参加した「NPO法人環境エネルギー政策研究所」の大林ミカ副所長から会議の内容が報告された。また、京都議

定書に参加していない米国のカリフォルニア州、CO2の排出量が増加している新興国の中国、インドの排出量削減の取り組みや環境先進国ドイツの自然エネルギー導入の状況を取り上げ、日本政府の取り組みは、遅れていると指摘し、日本各地で取り組まれている先進的な事例も紹介された。

「ワークショップセミナー」では、四つに分かれた分科会で活発な意見交換が行われた。また、元米国副大統領のアル・ゴア氏が地球温暖化防止を訴えるヒュ



大林ミカ副所長

「ワークショップセミナー」では、四つに分かれた分科会で活発な意見交換が行われた。また、元米国副大統領のアル・ゴア氏が地球温暖化防止を訴えるヒュ

第一分科会の「カーボンデモクラシーからCO2削減を考える」では、森林吸収源を活かした都市との協働的な温暖化防止の仕組みづくりについて意見交換。都市部の参加者からは「都市住民はCO2削減に積極的だが課題も多くある」また、地元山林所有者からは「高齢化や獣害などで山林維持は厳しい現状にある」などの報告があり、交流しながら楽しく活動する中で、温暖化について考えていくことが必要であると結論づけた。

業からCO2削減を進めるために」では、生産地から食卓までの距離が長い食料消費による環境への大きな負荷を認識し、地産地消の方策について意見交換。参加者からは「菓子材料を地元で栽培している」とや、「地元産へのこだわり」が紹介された。

また、旬以外の農産物を求める消費者がいる中で、地産地消・旬産旬消費の推進は、消費者の理解が必要であるという指摘もあった。

第三分科会の「温暖化防止の視点から地域観光



第二分科会の様子

を考えると、宿泊施設が進めるエコ事例が報告され、CO2を出さないホテルや地域づくりでお客様を呼べるかを模索。参加者からは「コストが高く、エコを推進していくのはなかなか難しい」との指摘もあったが、環境に対する意識を高め、身近なところから実践し、情報発信していくことが必要であることを確認した。

第四分科会の「環境に配慮した事業所における取り組み」では、事業所の実情に合わせて無理せず計画を立てて環境改善活動を実施し、地域ぐるみで環境保全に挑戦しようという活動(南信州いいむす21)についての事例が報告され、参加者は、具体的にどんな取り組みができるかを提案・協議した。

子ども達と一緒に環境問題を考える 環境ウオッチャー 吉田哲也(阿智村)

環境ウオッチャーとしての活動で、私が一番心がけていることは、子どもとともに活動することです。

それにはいくつかの理由があります。まず、「この子どもたち、この地域を引き渡すんだ」という気持ちを持つためです。この世は入れ物で、中身の一部である私たちは、次々に入れ替わっていくわけです。入れ物は大切に、きれいに維持していくことは



私たちがの使命ですが、次代を担う子どもたちの使命にもなるのです。その意識を私たちも、子どもたちも持つためには、子どもたちとともに活動することが一番です。また、「子どもたちの視線で、地域を見直す」という気持ちを持つことも大事にしています。しゃがむと見えてくるものがあります。木に登ると見えるものもあります。子どもたちは意外なものを見つめますが、それは活動場所の豊富さと、大人と違う体のサイズに由来するものです。しかし、今の子どもたちは、昔ほどいろんなところには行きません。むしろ私が引き回しているくらいです。見まわりや、川の生き物調べに子どもたちを連れて行くことは、大人

と子どもが一緒に環境問題を考える好機であると同時に、子どもたちを自然の中に連れ出すきっかけにもなっていると感じています。

レンジャー活動を通して思うこと

自然保護レンジャー 渥美邦三(阿智村)

活動区域は、恵那山域と木曽の南木曾岳、妻籠宿から馬籠峠までを中心としております。

先ず恵那山ですが、毎年十月頃を中心に、私の所属する山岳会員の協力を得て、約一週間かけて登山口から頂上までの登山道の笹刈りを実施しております。若い会員がビーバーで刈り、私や女性会員が刈り取った笹を片付けるのですが、大変な作業です。作業中に出合う登山者から感謝の言葉を掛けられると、苦勞が払拭されて気持ちが癒される思いです。



恵那山は、年間八千人から一万人が入山します。しかし、高山植物の踏み荒らしや、ゴミの不法投棄はほとんど無く、美しい山になってきたと痛感しています。多勢の登山者の安全を願って、年間二十回ほど登山道の修理等の活動をしています。

次に富士見台高原ですが、最近ではロープウェイや、遊覧バスを利用してのハイカーが多く、それに比例して弁当の空箱、ビールの空き缶、ビニール袋等の散乱や、タバコの投棄も増えています。

また、立入り禁止区域へ集団で立ち入られた場合には、一人で制することは困難です。立入り禁止内で五人グループが平然と絵を画いている光景に接し、愕然としました。月に十日程は遊覧バスに同乗し、富士見台高原や景色の案内をしながら自然のルールや、人間と動物とのかわり等を話し、乗客に少しでも自然に対する知識を持つてもらえればと思います。思い活動しています。また、七月中旬にはササユリが高原一帯に咲き、ハイカーが集中するので、岐阜県側から入山して、盗掘や切り取る人が

次に富士見台高原ですが、最近ではロープウェイや、遊覧バスを利用してのハイカーが多く、それに比例して弁当の空箱、ビールの空き缶、ビニール袋等の散乱や、タバコの投棄も増えています。



環境課から

自然保護レンジャー・希少野生動物植物保護監視員として活躍する渥美邦三さんは、下伊那地方事務所が主催した「平成十九年度南信州地域づくり大賞」において、「くらし・生活・環境部門」で奨励賞(下伊那地方事務所長賞)を受賞されました。おめでとうございました。詳しくは、下伊那地方事務所のホームページに掲載されていますので御覧下さい。

溪流のシラヒゲソウ

希少野生動物植物保護監視員 古松隆明(飯田市)



那における現状についてお知らせします。

シラヒゲソウは、ユキノシタ科の多年草で、関東以西の表日本に稀に分布している日本固有種です。下伊那では過去に、龍東伊那山脈の溪流や湿地で三ヶ所ほど発見された記録があります。

記録地以外で、先人の示唆された地は崩落しています。平成十二年六月に、標高千メートルの尾根伝いの小溪流に自生しているのを発見し、現在に至っています。

伐採後にササ、シラカバ等と、ツガ、コナラ、ヤマナラシ、ヤマネコヤナギなどの混交林の間に花崗岩の露出した溪流があり、流れの端にニシキウツギ、カンスゲ、ウワ

バミソウ等の湿潤植物に混じって岩隙に数平方メートルほどが叢生しています。形状は小形で、飛沫を浴び溪流岩隙に張り付くように、小根を張り連絡体で繋がりがコケと共存しています。繁殖は、種子が確認できないため、偽ローゼットの幼芽、連絡体の発芽によると予想

ています。自生地は不安定な傾斜地で、緩傾斜に繁殖することを願っています。なお、自生地は県の保護区域以外ですので、範囲を広げるよう要望します。それまでは公表を控え、観察を継続します。郡内でこの種の情報がありませんでしたらお知らせください。

ボカシ作り

消費者の会の取り組みから

地球温暖化防止活動推進員 小川光兵(松川町)

松川町消費者の会は、主婦を中心に約二十年前から活動を続けています。現在会員は百五十名ほどで、学習会・研修旅行などのほかに、二年前からボカシ作りを行っています。

●ボカシの作り方
ボカシは、もみ殻とこぬ



ボカシの作り方とボカシ生ごみ肥料の作り方について御紹介します。

- ①ボカシ専用のポリバケツ(写真)の中に、台所から出た生ごみを入れます。
- ②ボカシをひとつかみ(約十グラム)を①に均一にふりかけます。
- ③空気を遮断するためにビニールをこみの上にかぶせて、上から押しごみの中の空気を抜きます。
- ④容器に空気が入らないように、ふたをしつかり閉めます。
- ⑤底に溜まった浸出液を頻繁に抜き、ペットボトルに溜めておきます。
- ⑥一〜二週後に、「ボカシ生ごみ肥料」として畑に施します。

ボカシは、ふれあい広場(福祉まつり)や町の文化祭などで販売するほか、福祉協議会でも取り扱っております。松川町は、北部五町村の中で燃やすごみが特别多く、その主な原因が生ごみにあるそうです。消費者の会のボカシが各家庭で使われて、生ごみが減り、燃えるごみの減量化ができれば願っています。